



<乗物と排泄>

大西巖

隨筆

自動車の排ガスと空気の汚染についての論文と思われてはお恥かしいので最初に断つておく。これは乗物の中ですべての大小便についての余りお上品でない話である。従ってキレイ好きの淑女、紳士はここまでとし、あの活字には軽べつの横目を流すだけにして頂きたい。

しかし、よく考えてみると淑女、紳士でも生きている以上は必ず排泄がある。特に健康を保つためには順調な排泄がなければならない。ある有名人とのインタビューで担当記者達が『何を一番欲するか』と質ねたのに対し、彼は『毎朝、快適な便通のあること』と答えたという記事を読み、さもありなんと感じ入った次第である。古来、不老長寿の薬といわれた草根、木皮剤も、現在ラジオ、テレビで保健薬としてもうけを競う新薬もその第一には便通を考慮した配合になっている筈である。私は有難いことに物心ついてこのかた、盲腸を取去った以外、他のレットとした病を患った記憶がない。ただシンマシン、水虫になやまされ、時々ズボ(おできのこと)や痔に見舞われるぐらいで病気までが下品にできている。時にはほかにももう少し上品な病気があろうものにと歎いたり、筋の通った病気で特等室のベッドに転つてみたいなどと勿体ないことを考えることすらある。便通の方は若い頃から極めて順調で朝、昼、夕の3回、特に食事をすると直ぐ催してくる。いわゆるトコロテン式であり、流れ作業式に近い。巧妙な人糞製造プラントとも考えられる。しかし、昼と夕方は催しても仕事の方に気をとられ、排泄を忘れることが多いので大体1日1回を原則としている。

.....◆.....

さて本論に入ろう。私の若い頃はまだ飛行機で旅する人も少なかったので、一度でよいから乗ってみたいと憧れていた。その時、ふと頭に浮かんだことは

『一休、便所はどないなことになっているのだろうか』

という、機中における糞尿処理の方法である。

『たれ流しよ。つまりだなあ、便所は底に孔がくりあ

けてあり、ぶつはそこから下界へ落ちるようになっているだけだ』

物知り顔の仲間が、私の不審に明解な答えを与えてくれる。

『それでは地上の人に汚いものがかかる迷惑だろう』

『馬鹿言え。うんと高い所からする大小便は地上につくまでには噴霧状になって消えしまう筈だ』

と友人はゲラゲラ笑って問題にしない。

『小便の方はさもあらんが、大便の方はまさかと半信、半疑で過ごして来たが、何にしても孔から下界を見おろし、悠々と放尿、脱糞する時の大壯觀は私の憧れであり、腦中から清えなかった。後年、私が始めて飛行機に乗った時、シートベルトが外されて自由の体となるや脱兎の如く“TOILET”へ突入した。

鳥は体重を常に軽くする必要上、その骨はパイプでできており、『ふん』は文字通り流れ作業式に放出する。人間は心が緊張する時に脱糞する。たとえば運動選手ではゲーム直前に便所に入る人が多い。夜盗は目的とする家の近くに脱糞する。これは家人を熟睡させための『まじない』だという人もあるが、やはり緊張からであろう。つまり、充分活動するために体内の不用物を捨てて身軽になる必要があり、オートメチックレギュレーションと考えてよからう。

夜盗の脱糞で思い出したが、H工人のT教授が子供の頃、丹波の小都市で大異変の起ったことがある。夜盗の脱糞らしいが、直径70~80mmの偉大なものが重なり合っている。形状、色相からして牛馬糞の類でなく、確かに人糞であり、立会の警官にも謎が解けない。今なら『雪男の來訪』として騒がれる所であったろう。この人騒がせの原因は悪童が太い竹筒に人糞を詰め込み、トコロテン式に押し出したものと判ったが、T教授はその悪童が自分だったとは白状していない。

脱糞が脱線し始めたから話を元に戻そう。私がまっ先に便所に飛込んだ理由は緊張感のためではなく、機内便所の機構を確かめたかったからである。結果は失望の一語に尽きる。下界は何処にもない。ペダルを踏んで中ぶ

たをあけてみたが、その下は下界でなくてタンクらしい。これ程つまらない便所はないが、他人に迷惑をかけない点では文句のつけようもない。

しかし待てよ。こんな豪華な旅客機でなく、単座もしくは複座の小型飛行機の便所は一体どうなっているのだろう。大分以前のことになるが、女流飛行士某が何十時間かの連続長距離飛行記録を造ったことがある。大便の方は何とかがまんできるとしても小便の方はがまんできないだろう。そのニュース記事を眺めながら

『男なら空瓶、ゴムホースなども利用できるが、女では処置困難だ。どうしているのだろう』

半ば同情、半ば疑問で独語すると

『男族はだらしがないが、女は男と違って辛抱強いですよ。花嫁さんなど結婚式、披露宴と続く時には、朝から晩方まで用が足せるものですか』

『山のかみ』からのお告げがあった。貯水容量の差ではないかと思ったが、成る程そんなものかというように神妙に承っていたのは世の男性に対して申し訳のないことであった。

.....◇.....

使用度数も多く、問題も多いのが列車便所である。惨禍は沿線、時にはプラットホーム下の落し物と通行人や沿線住宅への黄金液撒布である。私が夜行で上京すると横浜に近づく頃に朝の用を足すことになっている。習慣は恐ろしいもので、車中でふと便意を催すと『ははア、横浜は近いな』と判断できる。腸内充填物が放出のきざしをみせ始めると列車はスピードを落とし、今や呱々の声を挙げんとする瞬間に列車は完全に停止する。『しまった。またプラット下に恥を曝すわい』と後悔しても、一旦出かかったものは今更元へ戻しにくい。横浜駅の駅長さんよ、あなたの駅に残された排泄物の何パーセントかは明らかに私のものであり、誠に申し訳ないと責任を感じている。

プラットホーム下の排泄物の処理は一体どうなっているのか。私は有縁の衆としての責任上、列車を待つ間にはこのことに留意している。東京駅はさすがに日本の代表駅らしく、プラット下はコンクリート床になっており、ぶつはその溝の中を流れ去るようにできている。換言すれば東京駅プラット下全体が一大水洗便所となっている。大阪駅には栗石がつまっている。ここでは係員が水道ホースで強い圧力水をかけ、栗石の下へ不行儀のあとを散らしている。他の駅でも大阪流が多いのではないかろうか。レールの枕木の間や下に敷きつめた栗石の効果は霜柱や氷が枕木を持ち上げることを防ぎ、振動や騒音を少くする役立つとは聞かされていたが、汚物をかくすのにも役立つとは考えていなかった。

さて、車中便所の使用回数と所要時間の方はどうなっているのだろうか。国鉄当局のデータを見ると10時間以内の旅行者ならば1人で1.5回使用しており、男子で1分、女子では1分20秒となっている。もちろんこの値は平均値であり、レディの中にも10秒フラットの記録者がある。女子が男子よりも長時間を要しているのは生理的、本質的なものではなく、おそらくその前後の動作に時間を要するからであり、本番では女子の方が短時間で終了するらしい。このことは宴会紳士連が唇をとがらして力説するのをきけば成る程とうなずける。

女はザーッ、はいそれまで。男はジャージャー、チョロチョロ。滝にたとえると女はナイヤガラ、男は音羽の滝。樽の水にたとえると女は底板を抜いた時の水流の如く、男は底板にドリルで孔をあけた時の如し。そこで、水洗便所ではフッシュを流しながら用を足すのがレディのエチケットとか。

液体排泄は紳士諸氏のお説を信じるとしても、固体排泄の場合は男女性別によらず、個人差による筈である。私は痔の気配があると他人に迷惑とは思いながらも所要時間は相当長くなる。かつて窓硝子の全部取去られた列車便所で用を足した経験がある。割れたガラスを乗務員が気をきかしてすっかり取外しておいたのであろう。列車は速いスピードで走っているから外からは判るまるでたかをくくっていたが、運悪く急行停車駅に入つて停車してしまった。窓の向う側のプラットホームを見ると朝のラッシュで勤め人、学生などで黒山である。しかも、その誰もが今停った列車の方を眺めている。幸い胸から下は側板でかくれているが、窓の形で便所と気がつくだろう。それでも私は進行方向に向けていた上体を90度ひねって窓側に向け、一般座席の客を粋ったが冷汗三斗の思であった。

なが便にはつらい思をすることもあるが、将来の楽しみもある。たとえば『一きぼり10里におよぶ施肥』である。つまり、新幹線ができて200キロで走るとすれば10分間の頑張りは10里の距りに施肥できる訳であり、将に天下の快挙とも言うべきである。ところが残念ながら新幹線は全部タンク式になるとの話を聞くにおよんでこの夢は一瞬にしてけしとんだ。

国鉄ではこのタンクの容量を定めるために自働記録装置を造ったとか使ったとかの噂がある。つまり、便所使用回数や時間は簡単に判るが、大小便の区別はつきにくい。そこで重量物が落下すると自働的に判るようにしておくのである。国鉄は彼らの持てる膨大な科学力をフルに使用し、迅速、隠密裡に私共のプライバシーにまで立入ってくるかも知れない。その真偽は別として将来特急車、急行車と順次に列車便所がタンク式に変ることは事

実だろう。こうなると沿線の各種被害も少くなろうし、また閑門トンネルのように便所に施錠して乗客を非人間扱いにしたことも語り草となろう。そして列車便所もやがてまた実に味気ないものになってしまうだろう。

.....◆.....

悠々とした気分を味わえるのが汽船の便所である。中に入って気分のこせつかないのはゆったりとしたスピードのためであろうし、列車のような鋭い衝撃の少いためであろう。列車便所では目の前の“手がかり”を両手でしっかりと握っていても壁におでこをぶつける。小便ではあちらこちらへ散らさずに目的位置へ放出するためには特殊技能を要し、特にそのスタートとフィニッシュには神経を消耗する。船では別に小便用が設けられているし、総体に面積もゆったりとっている。

水は無限に補給し得るであろうから、水洗の水を流がす場合にも惜し気なく使用できる。穀類を主食とする動物の便は脆いが、肉食の多い動物の便は粘く、便器の面になじみ着くとちょっとやそっとでは離れない。列車便所では流水量が少いから全部を流しにくい。あとに入った篤士家は世のため、人のためとおのれの小便で流し去ろうと努力するがピストル射撃では的を外すことが多い。その点、船の便所は清潔である。将棋に“雪陰詰め”という言葉がある通り、便所は動きのとれない隅っこにあるのが常識らしいが、船の便所は隅っこは限っていない。列車便所も客席の中程へ移してみれば少しは清潔になるかも知れない。

船では黄金しぶきを通行人や人家にぶっかけるおそれもない。たとえ窓から多少飛込んだとしても『しおはからいね』と舌づりして済ましておられる。その上、魚族は思わず駆走に舌づみを打って肥るだろう。しかしつてよ、河口近くで赤痢やチブスの菌をばら撒くとハシケその他の水上生活者に伝染する機会が多い。するとやはり浄化の必要があり、列車タンクよりも寧ろ入念に消毒する必要があろう。

しかし、何と言っても水上生活者の小型木造船やハシケの便所ほどうらやましいものはない。便所は舷側からはみ出して造られていることが多く、低いか高いのあるものもあるものもあるが、他人をはばかる要はない、下は何れも海面が直視できる。四方と下方に海を眺めての海糞？は野糞よりも一段とスケールが大きい。品物は喜び勇んで波間に消え、何の臭も残さない。生物は海から生じたものであり、生きとし生けるものの印は喜びをもって母のふところへ帰るのであろう。

.....◆.....

本稿には一貫した哲学がない。切角読んで頂いたのに全く糞のやくにも立たなかったことをお詫びする。唯、あいつのことだから“乗物と排泄”という題なら、きっと変な乗物と変な排泄のことにまで筆を滑らすのではないかと内心ヒヤヒヤと御心配下さっていたであろう諸兄にはまずまず無事で何よりだったということぐらいが、せめてもの取柄と言えそうだ。

(大阪大学工学部溶接工学科教授)